

NIGHT TALK

written by HADEYA

KEEP WALKING

「俺さ……光より闇に惹かれるんだ。闇の中でこそ光は輝くから」

「私も。貴方、相当な闇でしょう？」

「まあね。ウルハは？」

「私、貴方以上に、闇」

「マジで？」

「マジで」

「49年間、愛する者を探して来た。初めて……見付かった気がする」

「とっくに気付いてたよ、私。貴方が私に夢中なの」

「……イナズマ、ブツ放すぜ」

「強烈なの、宜しく」

街灯の下、ハデヤはウルハにキスした。初夜——俺たちは燃えていた。

*

「迷ったんだ。散々、迷った」

「何が？」

「ウォッチ」

「ウォッチ？」

「これが迷った末、見出した解答。愛の証」

「これを私に？」

「今すぐ着用して欲しいんだ。今すぐ」

「……やめとく」

「何で？」

「まだ早い」

「今はその時じゃないのか？」

彼女は俺の目を見て告げた。その言葉は力強い。

「そう。今はその時じゃない。でも時が来たら着用する。即」

「……待つよ、その時を」

彼女はポケットにプレゼントをしまった。まだ〈その時〉でないと俺は学んだ。その時、が来ると信じ——。

*

「最近でこそ起きたら即、執筆って言うスタイルだけど、昔は夜風に当たってから書いてたんだ。現場を皮膚で感じるって言うのかな……そうするのが当たり前だった。ところが今は完全なルーティンワークでさ。タイムカードでも押した方が良くないかって思うよ。夜空を見上げて世界の空気に触れる……懐かしいよ、あの頃が。ま、10年近く——」

ウルハがハデヤの衣服を引っ張る。立ち止まり、唐突に切り出した。

「今」

「今??？」

ウルハが頷く。その眼差しは真剣そのもの、だ。

俺は言った。

「……ちょっと意味が分からないな。今、何をしろって——」

「今」

「……」

「早く」

「……俺と結婚して」

ウルハは無言で頷いた。以後は無言。人生最大のイベントを終えた後の余韻と静寂。

彼女は俺の左手を握った。その温かさ。

俺たちは手を繋ぎながら、ありふれた夜道を歩いていた。(ア)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872